「Die Brücke 架け橋」第727号 令和４年12月１日発行（隔月刊）公益財団法人日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌

2022 12

表紙の言葉

いやはや、なんとも味のある顔である。「くるみ割り人形」と聞けばチャイコフスキーのバレエを思い浮かべる方もいれば、E. T. A. ホフマン（1776-1822）の作品を思い出す方もいるだろうか。『くるみ割り人形とねずみの王様』(Nußknacker und Mausekönig, 1816) はホフマンの晩年に書かれた作品である、と言ってもホフマンの生涯は 46 年と短く、本格的に執筆を行なったのは齢三十を過ぎてから亡くなるまでの 14 年ほどだ。『くるみ割り人形〜』はクリスマスを舞台に少女の幻想と現実の世界が入り混じる作品であるが、童話と呼ぶにはホフマン節が強烈過ぎて、『黄金の壺』や『砂男』で味わった不気味さを思い出さずにはいられない。法律家と音楽家の顔も持つ異色の作家であったホフマンの目には、この不思議な人形はどのように映っていたのであろうか。

田中 洋（杏林大学外国語学部　専任講師）

写真：エルツ山地「くるみ割り博物館」内のくるみ割り人形
©Tourismusverband Erzgebirge E.V./René Gaens

Zum Titelbild

Tja, er hat ein stimmungsvolles Gesicht. Wenn man das Wort "Nussknacker" hört, mögen Manche an Tschaikowskis gleichnamiges Ballett denken, Andere an das literarische Werk von E. T. A. Hoffmann (1776-1822). Hoffmann hat in den späteren Jahren seines Lebens, welches nur 46 Jahre dauerte, „Nußknacker und Mausekönig“ geschrieben. Intensiv zu schreiben, begann erst nach seinem 30. Lebensjahr für seine letzten 14 Jahre, bis zum Tod.

„Nußknacker und Mausekönig“, stellt eine Weihnachtsszene dar, in der sich die Fantasie eines Mädchens mit der Realität vermischt, als Kindermärchen könnte man es jedoch nicht beschreiben. Hoffmanns intensiver Stil hinterlässt ein mulmiges Gefühl, welches an Werke "Der goldene Topf" oder "Der Sandmann" erinnern. Wie wohl diese außergewöhnliche Gestalt in der Vision ihres Schöpfers, des Juristen, Musiker und Schriftsteller, Hoffmann, ausgesehen haben muss, ist für uns wohl nur schwer vorstellbar.

Hiroshi Tanaka
(Dozent der Fakultät der Fremdsprachen, Kyorin Universität)

(Foto) Erzgebirge: Nussknacker im Nussknackermuseum
©Tourismusverband Erzgebirge E.V./René Gaens

目　次　／　ページ／ Seite　／　INHALT

巻頭言 柚岡 一明	1	**Vorwort** Kazuaki Yuoka
レポート：日独協会設立 111 周年記念講演会 ーフォン・ゲッツェ ドイツ大使をお招きしてー 菊池 菜穂子 **レポート：シュタインマイヤー大統領ご夫妻との座談会に参加して** 竹内 優	2	**Bericht: Jubiläumsfeier anlässlich des 111-jährigen Bestehens der Japanisch-Deutschen Gesellschaft – Ehrengast Herr Botschafter von Goetze –** Nahoko Kikuchi **Bericht: Teilnahme an einem Rundtischgespräch mit Bundespräsident Steinmeier und Frau Büdenbender** Yu Takeuchi
レポート：ドイツフェスティバル 2022 菊池 菜穂子	4	**Bericht: Deutschlandfestival 2022** Nahoko Kikuchi
10 月の協会活動報告	5	**JDG-Aktivitäten im Oktober**
エルツ山地のクリスマス焼き菓子作り リンダ・ウルマン	6	**Weihnachtsbäckerei im Erzgebirge** Linda Ullmann
私とドイツ 藤本 悟	7	**Deutschland und ich** Satoru Fujimoto
研修生コラム：食のカルチャーショック マヴィン・アルバト	8	**Kolumne des Praktikanten: Ess-Kulturschock** Marvin Albert
特別寄稿：ドイツで日本の食文化を伝える 戸田 英聖	9	**Beitrag: Vermittlung der japanischen Esskultur in Deutschland** Eisei Toda
ベルリナー・ルフト：フンボルト・フォーラムの新しい茶室 Dr. ヴェレーナ・マテルナ	10	**Berliner Luft: Das neue japanische Teehaus im Humboldt Forum** Dr. Verena Materna
文化の玉手箱：新刊紹介と映画レビュー	11	**Kulturkiste: Neue Bücher und Filmreview**
ドイツ経済の動き 伊﨑 捷治	12	**Tendenz der deutschen Wirtschaft** Shoji Isaki
お知らせ	13	**Informationen**

事務局の視点で2022年をふりかえる

柚岡　一明（日独協会 常務理事）

コロナとともに

新型コロナウイルスの感染拡大が始まって3年近くが経ちました。感染症の影響が長期化し、絶えず変化する現状にどのように対応していくかは協会の直面する課題となっています。

この3年間を振り返ると活動に大きな変化がありました。2020年はテレワークを導入し、オンライン化に奔走しました。2021年はオンラインの講演会、ドイツ語講座、文化イベントの参加の対象を海外まで拡大しました。また、ベルリン独日協会や独日協会連合会とのオンライン会議を開催し、ドイツとの意思疎通を図りました。一方、対面イベントが減少し、会員の高齢化と相まっての個人会員の退会、またコロナ禍での経営不振から法人会員の退会が目立ちました。

対面イベントの再開

オンライン交流だけでは対面イベント実施による交流の代わりとはならないことにも気づかされました。2022年後半からオンライン交流を継続しつつ対面事業も増やしていきました。9月19日には八木毅前駐独日本国大使、楠根重和石川日独協会名誉会長を講師とした連合会主催講演会、10月25日にはフォン・ゲッツェ大使を、11月18日には柳秀直駐独日本国大使をお招きした日独協会設立111周年記念講演会を実施しました。

どの講演会も多数の参加者を得て、活発な議論と交流を実現できました。また、3年ぶりの「クリスマスの集い」を12月2日に開催し、大変盛況でした。これら対面イベント開催によって個人会員の入会者が増えたことも事実です。

緊密化する日独関係

2022年には、日独関係において大きな変化があり、外交・安全保障の面で両国間の頻繁な政治交流が展開されました。ドイツはロシアのウクライナ侵略を受けて、強権国家へ強固な姿勢をとり、同じ価値観を持つ日米・欧州民主主義陣営間の関係強化を優先する外交へと舵を切りました。

4月にショルツ首相が就任後初の東アジアの訪問先として訪日、7月にはベアボック外相が訪日し、日独外相会談を実施。11月にシュタインマイヤー大統領が訪日し、日本を「信頼関係で結ばれた民主主義国家」と言及、経済面においてエネルギー・資源・食料・環境・デジタル社会などの課題解決にむけて両国の関係緊密化への期待を示しました。

若者支援が今後のイシュー

日独・独日両協会連合会においても、具体的な交流が始まりました。2018年金沢の日独交流国際会議で採択された金沢宣言の進捗を検証するため、両国の連合会による国際会議を2024年秋にベルリンで開催する準備を進めています。

金沢共同宣言の主な内容は下記のとおり。

① 両連合会はインターネット上にプラットフォームを設け、情報を共有する
② 若者交流を支援し、我々の協会の目的に共鳴し、我々にプロジェクトを提案し、それを遂行する若者を支援する
③ 我々の価値・文化・関心についての対話を継続する
④ 我々は、日独関係にとって市民社会の交流が格別の重要性を持っていることへの理解を促す
⑤ そのためには日独両協会の垣根を越えた会議の可能性を探る

訪日したシュタインマイヤー大統領の要望に応え、11月2日東京にて「社会におけるボランティアの意義」をテーマに日独の若者による討論会が開催されました。当協会はユース会員の竹内優さんを推薦し、登壇頂きました。

竹内さんは千葉県日独協会、日独ユースネットワークの会員でもあり、日独の交流に活躍しています。討論会では日独協会でのボランティア活動の具体的な説明と2024年夏に開催するベルリンでの国際会議への支援を大統領に訴えました。

また、前述のフォン・ゲッツェ大使講演会では学生会員の相澤凌平さんがコメンテーターとして登壇し、大使の講演内容を踏まえて、若者交流の重要性とデジタル社会実現への両国の連携に対する期待について言及しました。相澤さんは昨年ドルトムントのIT企業で半年間のインターンシップを終え、現在上智大学の情報学大学院生です。日独協会が次世代を担う若者にこのような機会を提供することの重要性を実感した次第です。

日独協会役職員一同、会員・協会関係者の皆様の2023年のご多幸を祈念し、これまでのご支援・ご協力に感謝申し上げます。

レポート

日独協会設立 111 周年記念講演会
フォン・ゲッツェ ドイツ大使をお招きして

日時：2022 年 10 月 25 日㈫　18:00 ～ 20:30
会場：東京ドイツ文化センター 1 階 OAG ホール

菊池 菜穂子（日独協会職員）

1911 年に設立された日独協会は今年で 111 周年を迎えました。これを記念し、フォン・ゲッツェ大使をお迎えしての講演会を開催、久々にたくさんの会員が集う機会となりました。この機会に参加者の皆さんがなるべく大使と交流できるよう、事前に大使への質問を受け付けたり、コメンテーターとの座談会を取り入れたり、会場からの質疑応答の時間を多めにもうけるなど工夫を凝らし、最終的には 100 名のお申込みがありました。

講演会は、司会の柚岡常務理事のご挨拶からはじまり、10 月 12 日に急逝された中根副会長に参加者全員で黙祷をささげた後、大使のお話が始まりました。

大使のご講演

まずは日独関係の歴史と変化について語られました。明治時代からの学術・文化交流の基盤の上に戦後の経済関係が築かれ、今も強化されていること、「気候変動」・「少子高齢化」・「デジタル化」などの変化に伴い、制度を変え、技術向上に取り組むことが国の能力をあげることに繋がるという考えから、ドイツの産業改革 Industrie4.0 や日本の科学技術政策 Society5.0 の例を挙げられました。

ロシアによるウクライナ侵攻については、「1990 年に冷戦が終わってから見たことのない状況」と表現され、侵攻によって多くの死傷者が出ているだけでなく、エネルギー・食料品価格の上昇がドイツの製造業や一般家庭に大きな負担を強いていると述べられました。大使はしかしこういった全ての点においても日独の連携に大きな可能性を感じているそうです。例えば、両国はエネルギー・パートナーシップを結んでおり、水素エネルギーの利用や輸送の分野で研究が進んでいるということでした。

大使のお話に耳を傾ける参加者たち

フォン・ゲッツェ大使

ロシアのウクライナ攻撃当初から、日独はロシアへの制裁に関しても連携しており、安全保障戦略の改訂についても多くの話し合いがもたれているだけでなく、ドイツ軍と海上自衛隊の共同訓練や、ドイツの空軍戦闘機が来日しての訓練など、実際の協力を深めていることにも触れられました。このように激動する世界秩序の中で、国際サプライチェーンや技術知見を共有すべきはドイツと日本のように価値観を共有できるパートナーであり、これからも問題や課題にともに取り組み、関係を深めていくことができると述べられました。半年の間にショルツ首相、ベアボック外相、シュタインマイヤー大統領が来日したのもその証であるとのこと。

「ドイツは日本にとって良いパートナーで、共に課題に取り組むことで前に進んでいけるということをぜひ周りに広めて欲しい」というメッセージで大使は講演を締めくくられました。

コメンテーターが登壇しての質疑応答

質疑応答

大使のお話の後、協会の恵谷英雄副会長と学生会員の相澤凌平さんが登壇しました。恵谷副会長は「留学生としてドイツに暮らした 1983 年に、環境政党の「Die Grünen（緑の党）」がはじめて議席を獲得、それから 40 年経ってもドイツの環境意識の高さに驚かされる」と前置きしてから、大使が日本の環境政策をどうご覧になっているか質問されました。大使はこれに対して、ドイツでは 2035 年までに脱酸素を実現することを目標にしており、カーボン・ストレージ（炭素の地中貯留）には未来がないと考えられているが、日本では石炭・火力を新しい技術を使ってどう使い続けられるかが焦点となっている、そして原子力に関してもドイツは 11 年前に脱原発を宣言し、現在稼働中の 3 基も 2023 年 4 月に止める予定だが、日本では原子力を今の技術でどう安全に使用するかを考えている、という両国の環境政策の違いをあげられました。

続いて、大学院で情報学を研究されている相澤さんが、「デジタル化が必要という大使のお話から、自分にも何かこれからできるかもしれないという希望を感じた」と感想を述べてから、日独の将来を担う若者に期待する体験や学びはどんなことか質問されました。これに対して大使は、「世界には様々な課題があり、1国では解決できず、国々が手を携えて立ち向かう必要がある。例えば留学や国際的な会議への参加など、対面での国際的な繋がりを積極的に探して結んでいって欲しい」とお答えになりました。

最後に、会場との質疑応答時間が儲けられました。質問は「日本で訪れた中で一番印象的だった歴史的な場所」、「ドイツの教員不足や医者不足について」、「ドイツにおける身分証明書と比べると、日本のマイナンバーカードの普及はまだまだであるが、身分証明書の普及を進めるために社会に必要な制度、構造は何だと思うか」、「若者交流を促進するための公的援助について」、「ドイツにおける電気自動車の将来」といった多様な質問が寄せられ、大使はそのすべてに丁寧にご自身のお考えを述べられました。

懇親会

質疑応答の後に、柚岡常務理事から「日本各地で美味しい地酒をお召し上がりになったと思いますが、ぜひ東京の地酒もお楽しみください」と青梅市の小澤酒造のお酒が贈呈され講演会は終了。引き続き、同じホール内で懇親会が行われ、ドイツレストラン「マールツァイト」さんのドイツパン詰め合わせとコーヒー、ソフトドリンクが提供されました。大使の前には、直接大使とお話ししたい方々の長い列ができました。長い講演の後でも疲れた様子を見せずに、お一人お一人のお話に耳を傾けられていました。

今回の講演会で印象的だったのは、大使が質問に答える際にまず「ご質問ありがとうございます」や「ドイツに関心を寄せていただきありがとうございます」と始められ、どのような質問にも真摯にお答えくださったことでした。また、事前に寄せられた質問や会場での挙手が多く、参加者の皆さんがこの機会に大使のお考えを存分に知ろうと高い関心を持って臨まれているのを感じました。皆さんのこの熱意のおかげで非常に有意義な講演会となったと思います。

レポート

シュタインマイヤー大統領ご夫妻との座談会に参加して

竹内 優（日独協会ユース会員）

11月2日㈬、代官山T-SITEにて開催されたドイツのフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー大統領とエルケ・ビューデンベンダー大統領夫人との座談会に参加いたしました。ボランティア活動に従事する日本の若者3名、ドイツの若者2名が参加し、非常に和やかな雰囲気のもとで1時間におよぶディスカッションが英語で行われました。他の日独の若者4名のバックグラウンドは実に多様でしたが、私は所属する日独協会、千葉県日独協会、日独ユースネットワークでの経験により、主に日独交流の観点からお話しさせていただきました。

（左から）著者、エルケ夫人、シュタインマイヤー大統領

「ボランティア活動」がテーマの本ディスカッションは、ドイツ日本研究所のフランツ・ヴァルデンベルガー所長による司会のもとで行われました。まずは各登壇者からこれまで取り組んできたボランティア活動の内容紹介があり、その後は日独のボランティア活動の違いや共通点、社会におけるボランティア活動、今後の日独の政治において期待することなど話は多岐にわたりました。ディスカッション中、大統領ご夫妻は私たちの話に熱心に耳を傾け、気さくに質問をしてくださったり笑顔で接して下さったりしたのが非常に印象的でした。個人的には、ディスカッションの最後に2024年秋にベルリンで開催予定の国際会議について触れ、日独若者交流の重要性を訴えることが出来たのが非常に大きな収穫でした。

本座談会の参加にあたり、参加者として推薦して下さった日独協会の柚岡常務理事と、独日協会連合会（VDJG）のDr. ユリア・ミュンヒ理事には心より感謝申し上げます。一生忘れられない貴重な機会をありがとうございました。この経験を糧にして、今後も日独交流に従事していきたいと思います。

レポート

ドイツフェスティバル

協会参加日：2022 年 10 月 9 日(日)　13:00 ～ 16:30

菊池 菜穂子（日独協会職員）

2011 年の「日独交流 150 周年」を機に始まった「ドイツフェスティバル」は、これまで毎年秋に東京の青山公園で行われてきましたが、コロナ禍で中止されていました。今年は実に２年ぶりに、横浜の赤レンガ倉庫特設会場に場所を移して行われました。

赤レンガ倉庫周りの広い敷地内では、たくさんの飲食ブースが出店する「オクトーバーフェスト」が同時に開催されており、海に近い奥側が「ドイツフェスティバル」会場でした。このイベントの特徴は、飲食のみならず、たくさんのステージプログラムやワークショップ、文化関係団体ブースの出店により、ドイツ文化を楽しんでいただけることです。ステージでは合唱団や管弦楽団、ドイツから来日したミュージシャンのコンサートに加え、ビアジョッキリフトアップ大会（ビールジョッキを片手でどれだけ長く持っていられるかを競う大会）が行われ、ワークショップブースではドイツワインやビールの講座、香水作り、ドイツ語入門講座などが連日行われました。協会も何かドイツを楽しんでいただくことができないかと考え、10 月 9 日（日）の午後、ドイツ大使館のブースをお借りして、「あなたのお名前をドイツ語（日本語）にします」というレクリエーションを行いました。

参加者にはまず、専用カードにお名前を漢字で書いてもらい（外国語の名前の方はアルファベットで書いてもらいます)、それを協会のスタッフがドイツ語（もしくは日本語）にしていきます。新旧研修生のマリアさん、マヴィンさんと、ドイツ語教師の小野先生、会員の小林さんらが日独のチームを組み、途中からは「中二病で学ぶドイツ語」や「学問のための基礎ドイツ語」講座でもおなじみの柳原伸洋先生（ペンネームは伸井太一）も翻訳チームに加わり、絶妙な訳が次々と生まれていきました。「明美さん」は „Strahlende Schönheit”、「真純さん」は „Geläutert” といった調子です。英語圏の参加者のお名前「Matthew」は、ドイツ語の „Matthäus” を経由し「待臼」（まてうす）となっていました（笑)。最初は直訳的な表現が多かったものの、慣れてくるとより凝った表現、ひねりのきいた訳となっていきました。翻訳したお名前をカードに追記して、読み方をカタカナで書き添えてお渡しすると皆さん大喜び。気づくと協会ブースの前には長蛇の列ができていました。

用意していた、お名前記載カード 150 枚は数時間で無くなり、別の用紙を使わなくてはならないほどでした。コロナ禍で直接会員の方に会う機会がなかなかありませんでしたが、ブースには会員やドイツ語講座の生徒さんもたくさん訪れてくれました。協会には、他のブースのように販売出来る商品や配布できるオリジナル・ノベルティグッズがありませんでしたが、翻訳をお手伝いくださったり、ブース前でチラシを配ったり、レクリエーションの説明をしたりしてくださったボランティアスタッフの皆さんのおかげで、参加者の方々に楽しんでいただくことができました。

お手伝いくださった皆さん、ブースにお越しいただいた皆さん、ありがとうございました！

ドイツ語講習会
2022 年度下半期コース
火～土曜日
Deutschkurse in der JDG
Oktober 2022 - März 2023
jeden Di.-Sa.

ドイツ時事問題研究会 第 81 回
10/15 (土)　15:00 ～ 17:00
Studiengruppe "Deutschland aktuell" (81)
Datum: Sa., 15. 10. 22, 15.00-17.00

当月のトピックスはインフレが進行するドイツの経済情勢と賃上げの動向、空中給油を繰り返しながらジェット戦闘機 6 機を派遣してアジア・太平洋諸国との連帯に強い意思を示したドイツ空軍、国家機関の儀式として実施されるドイツの国葬と追悼式の考え方、ドイツにおける統一教会の現状と自由。民主主義の基本秩序に沿って行われる憲法擁護庁による監視のケースなどについて、図表や写真を示しながら報告し、質疑応答を行った。

今月のテーマとしてはまず新井さんから「ドイツ対ロ外交とエネルギー依存」と題して、ドイツが天然ガスや石油でロシア依存を高めた歴史的背景や経緯を報告し、ロシアのウクライナ侵攻とのかかわりなどについて議論を交わした。

最後に伊﨑からロシアによるガス供給の停止にかかわらず拡大する備蓄、ガス調達先の変化と経路、将来に備えた水素調達の進展などについて報告し、懇親会に移って議論を継続した。(伊﨑 捷治)

独逸塾
10/17 (月)　19:00 ～ 21:00
Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland
Datum: Mo., 17. 10. 22, 19.00-21.00

参加者 28 名。下記の記事を取り上げた。
1. Die Welt 誌 2022 年 3 月 15 日 „Intel will Chipfabrik in Magdeburg bauen（インテル社がマクデブルクにチップ工場を建設）“の先月読み残した部分
1) EC チップ法が成立し 430 億ユーロの助成金が可能となった。マクデブルクのチップ工場はこの助成金の活用を考えている。
2) ショルツ首相は Intel の投資を歓迎している。そして旧東ドイツ地域における過去数十年来最大の投資とみられている。
2. Der Spiegel 誌 2022 年 7 月 9 日のフラッキング(天然ガスの水圧破砕法) に関する記事
1) フラッキングによるガス採掘は、ガス不足の緊急事態からドイツを救えるか。長年フラッキングは危険で地下水を汚染すると思われてきたが採掘技術は大幅に進歩している。しかし難点がある。
2) 米国はフラッキングによりガスの輸入国から輸出国に転じた。
3) 2018 年にドイツ政府が立ち上げた調査委員会の報告によると、フラッキングの危険性は十分な配慮があれば最小限まで減らすことができる。ロシアがウクライナに侵攻した 2 月 24 日前まではほとんどの政治家がフラッキングを口にせず、調査報告に関する言及もなかった。フラッキングをドイツが採用するかどうかは政治家の判断にゆだねられた。
4) ドイツでのフラッキングは試掘コストや 2045 年までに達成すべきカーボンニュートラルの問題があり壁にぶつかっている。
ドイツ語の解釈及び、群栄化学工業監理部のドイツ派遣社員の研修としてドイツ塾利用のオファーに関して議論が交わされた。(森永 成一郎)

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）
10/22 (土)　19:00 ～ 20:40
Sprachtreff
Datum: Sa., 22. 10. 22, 19.00-20.40

今年 10 回目のシュプラッハトレッフを開催しました。今回は約 40 人の参加でした。今回は手伝うことができなかったモデレーターが多かったですが、新モデレーターのヴォルフさんとコウヘイさんと一緒に上手く運営できたと思います。お二人に感謝しています。

今回はグループサイズを小さくしました、特に言語能力レベル B1 レベルの 2 つのグループはそれぞれ 4 人の予定でしたが、来なかった人がいたので、2 人（＋モデレーター）と 3 人グループになってしまいました。そのため、このグループの方々に、他の 2 人のグループと合併した方が良いか聞きましたら、皆さんは小さいグループのままが良いということでした。そんな希望がわかったので今度は参加者の人数を制限しなくてはならないと感じています。このように、私たちは毎回のシュプラッハトレッフの経験を次に活かして皆さんにもっと楽しんで頂きたいと思います。

もし、どなたかご自分の語学能力に自信がある方がいれば、ぜひモデレーターとして手伝っていただければと思います。モデレーターの参加費は無料となります。(マヴィン・アルバト)

エルツ山地のクリスマス焼き菓子作り

リンダ・ウルマン

シュトレンの生地に大量のレーズンを投入

心地よく美しい夏が過ぎ、日は短く、天気は寒々しく冷たく、雨が多くなり、そして木々の葉はすっかり色づいています。秋が、正確には 10 月の終わりがやってくると、友達の家に集まり一緒にシュトレンを焼きます。私はドイツの東部、チェコ共和国との国境に近いエルツ山地の出身です。昔は鉱山の採掘で栄えた土地ですが、今では親しみを込めてドイツの「クリスマスの里（Weihnachtsland）」と呼ばれることもあります。それは、ここエルツ山地がくるみ割り人形、木彫りの天使や鉱夫、煙出し人形（Räuchermänner）といったクリスマスの木彫り細工の生まれ故郷でもあるからです。この木彫りについては、今日はこのくらいにしておきましょう。ひょっとすると、いずれまたお話しする機会があるかも知れません。

木彫りの人形と同じように、シュトレンもエルツ山地のクリスマス文化の一つです。このパンのような形をした焼き菓子は、甘いイースト生地、カレンズ（レーズン）、オレンジピール、レモンピール、その他スパイスで作り、仕上げに雪のように白い粉砂糖を上にふりかけます。シュトレンはキリスト教と深い関係があり、その色と形は、淡い色の布にくるまれた幼いキリストを象徴しているとされます。このことから昔は、イエス・キリストの誕生をたたえるため、この焼き菓子をクリスマスの 1 日目(12 月 25 日)より前に食べてはならないとされていました（聖書の言い伝えによれば、イエスはクリスマスに生まれたとされます。キリスト教の伝統を持つ国々で、今日までその誕生を祝して祝われているお祭りがクリスマスです)。もちろん今ではこの決まりはそこまで厳しく守られているわけではありませんが、私の家では今でも、毎年秋になると 10 個ほどシュトレンを焼くという決まりを守っています。それらのシュトレンは友達や他の家族にも贈りますし、自分たちでも食べます。

生地とレーズンを混ぜ合わせます

それにしても、なぜもう秋のうちに集まってシュトレンを焼くのでしょうか？その理由はとても簡単で、シュトレンは焼きあがってから冷たく暗いところでもう 1 ～ 2 ヶ月寝かせてから食べると風味がよくなるからです。もちろん、ドイツの他の土地にもシュトレンはありますが、どの土地にも多かれ少なかれその土地ごとのレシピがあるものです。

Weihnachtsbäckerei im Erzgebirge

Linda Ullmann

楕円形に成形

Die Tage werden kürzer, das Wetter rauer, kälter und regnerischer als in der schönen Sommerzeit, und die Blätter an den Bäumen sind farbig. Es ist Herbst, genauer Ende Oktober, und ich treffe mich mit guten Freunden im Haus einer Freundin. Wir werden heute Stollen backen. Ich komme aus dem Erzgebirge, einer Region im Osten Deutschlands, nah der Grenze zur Tschechischen Republik. Die frühere Bergbauregion wird heute von einigen Leuten auch liebevoll als das „Weihnachtsland“ innerhalb Deutschlands bezeichnet. Hier ist auch die Heimat der Weihnachtsschnitzereien, wie den Nussknackerfiguren, geschnitzen Engeln, Bergmännern oder Räuchermännern. Aber darüber kann ich vielleicht ein andermal erzählen. Genauso wie sie gehört der Stollen zur erzgebirgischen Weihnachtskultur.

Das brotförmige Gebäck besteht aus einem süßen Hefeteig, Korinthen sowie Orangeat, Zitronat und anderen Gewürzen. Zum Schluss wird es mit einer schneeweißen Puderzuckerschicht bestäubt. Der Stollen steht in enger Verbindung mit dem Christentum, weshalb seine Farbe und Form das in helle Tücher gewickelte Christkind symbolisieren sollen. Aus diesem Grund durfte das Gebäck früher erst am ersten Weihnachtsfeiertag (25. Dezember) zu Ehren der Geburt Jesus verzehrt werden (nach einer biblischen Geschichte wurde zu Weihnachten das Jesuskind geboren. Dieses Fest wird in Ländern mit christlicher Tradition bis heute gefeiert – das Weihnachtsfest). Heute sind die Regeln natürlich nicht mehr so streng, dennoch hat es sich in meiner Familie bis heute gehalten, dass wir jedes Jahr im Herbst etwa zehn Stollen backen. Die werden zum Teil an Freunde und andere Familienmitglieder verschenkt oder auch selbst verspeist.

Doch warum trifft man sich schon im Herbst zum Stollenbacken? Ganz einfach, weil das Gebäck ein besseres Aroma erhält, wenn es nach dem Backen noch kühl und trocken ein bis zwei Monate ruhen konnte, bevor es verspeist wird. Natürlich gibt es Stollen auch in anderen Regionen Deutschlands...aber jede Region hat nun mal ein etwas besonderes Rezept.

シリーズ
私とドイツ File25

「私とドイツ」は日独協会の会員、関係者にご自身とドイツ・日独協会との関りについて語っていただくシリーズです。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

Bildungsreise に憧れて

藤本 悟（日独協会会員）

いつ頃からか、いくつかの理由でドイツのすべてに心を惹かれ、将来は気の済むまで彼の地の空気を味わいたいと思っていました。稀代の考古学者 H. シュリーマンの実践した Bildungsreise（引退後の教養旅行、以後 Br と略記）への羨望がその想いと結び付き、そのままずっと強い憧れとなりました。勤務先は、当時月間のサービス残業が何十時間にもなるマックロクロスケのブラック企業でしたが、福利厚生だけは充実しており、一定勤続後は 5 年ごとに 2 週間の長期休暇が取れました。私はそのすべてを、夢の実現下調べの為、単身でのドイツ周遊にあててしまいました。

25 年前には日独協会に入れていただき、女子学生のホームステイを受け入れ、又本誌を通じてベルリンとケルンに友人を得ました。彼らとは今も家族付合いが続いています。一方、独語、英語は各々検定 2 級を取得し、夢への準備を整えて行きました。60 才で定年退職後、すぐに Br を実行に移します。現役時代、子供 3 人での生活はギリギリで、シュリーマンのような実行の為の富の蓄積は少しも叶いませんでしたが、夢への情熱は彼にも比肩したと思います。以下、その間の体験から特に印象深かったことについて、お伝えしたいと思います。

Volkshochschule（市民大学 vhs）

マインツ　放課後のカフェで

既に何回か本欄でも触れられていますが、ドイツでは市民向けの教養文化講座が多数用意されており、特に語学は充実しています。外国人はもとより、短期滞在者にも開放されている所にこの国の懐の深さを感じます。私は二つの街で計 5 回お世話になりました。世界各国から来ている独語クラスの仲間は皆陽気ですが、ドイツで職を得なければならないので必死です。他方私には毎日楽しいことこの上なく、憧れのドイツ生活を満喫していました。ところがやがて物足りなくなります。

正しい独語を話すのは先生だけなのです。思いついて英語のクラスも受けてみました。そこでは当然生徒は地元の市民で、狙いは的中し、独語の響きを堪能します。街中でも同級生に出会ったりして気分は住人のようでした。

アウクスブルク ドイツ語クラス（左端が筆者）

更に私に幸運が訪れます。古都アウクスブルクは旧市街をトラムがゆっくり通る情緒溢れる街です。そこの老舗ホテルのアパートメントにお世話になっていましたが、経営者の奥さんが日本の方で vhs で日本語を教えていました。何と、「ゲストとして授業を覗いてみませんか？。」とおっしゃるではありませんか。恐る恐る次の夜に指定されたギムナジウムの教室に行ってみると、これが大歓迎でした。以後も滞在中はアシスタントとして出席させていただくことになります。この後、生徒の何名かは来日時拙宅にも寄ってくれました。こんな風に vhs のおかげで滞在中は充実した日々でした。

ドイツ人の英語　（3 単現の S）

英語クラスでは 3 単現の S がドイツ人にはなじみが無いようで、よく先生に「また忘れてる！」と叱られていました。あの独語の複雑な人称変化を難なく操る彼らが、たった一つの変化に戸惑う図は私には密かな抱腹絶倒ものでした。

Kaltes Essen

ドイツ家庭の夕食は質素とよく言われます。ケルンの友人宅に泊めていただいて体験しました。夕刻、コーヒーと少しのスープとパンが出されます。『夕食前に、お茶するんだ、へぇー。』位の気持ちでした。やがて居間へ移動し TV など見て雑談します。寝る前にやっと気付きました。『あれが世に聞くカルテスエッセンだったんだ！。』翌朝はテーブル一杯に朝食がセットされていて食べ過ぎました。

マインツ、ザンクトシュテファン教会

シャガールのステンドグラスで有名ですが、一歩内側へ入り込むと何条もの神秘の青い光線に息をのみます。2 度目に妻を案内した際、いつもは付合い見学の彼女ですがこの教会だけは目を見張っていました。どこもはずれの無いドイツで敢えて一つを推すならこちらです。

ずっと片想いだった私のドイツですが、Br 体験後、やっとほんの少し彼女の方から微笑んでくれるようになったと感じています。災い収束後の再訪を待ち望んでいます。

著者プロフィール：青山学院大学卒業、銀行勤務。定年退職後学習塾講師を続けながらアウクスブルク、マインツで遊学。2021 年ドイツ語検定準 1 級に最年長で合格。

マビンの冒険記
研修生コラム

食のカルチャーショック

マヴィン・アルバト(日独協会研修生)

トリアーで学生生活を送りながら、和食レストランでアルバイトをしています。厳密には何のレストランと呼んでいいかわかりません。ラーメン、どんぶり、和風カレーなど、日本のレストランでは通常、同時に注文できないような料理を提供しているお店だからです。

レストランのあるトリアーは僕の大学の所在地でもあり、大学生活の一環として現在日独協会で研修をしています。この街には世界各国からの観光客も多く、多くの人がこの小さなレストランに迷い込んで来るのですが、お客様の大半はもちろんドイツ人で、アジアの文化や食事、ましてや日本にあまり縁がないご年配の方もいらっしゃいます。そのため、味噌汁や牛丼が極東の異国料理と受け取られ、これらを食べるための箸を使うことも日常的ではないので、金属製のスプーンを要求されることも少なくないです。同様に、多くの人はラーメンにはフォークを使い、スパゲッティのようにれんげの上で麺を巻いて食べます。

メニューで食材を見ているお客様からは、様々なリアクションがあります。味噌やあんこや海苔がどんなものかとよく聞かれますので、詳しく説明させていただき、嬉しいことに、ほとんどの方が美味しいとおっしゃってくださいます。

一度にたくさんの新しいものを食べたくないという人のために、あまり日本風ではないものの、ヨーロッパ人にはそう見える料理も用意しています。照り焼きソースで焼いたサーモンを、ネギとレモンのスライスと一緒にご飯に乗せた「焼き鮭丼」というメニューです。

日本からの留学生やサラリーマンの方々が店の料理にいつも良い評価をしてくださり、常連客になってくださっているので、僕らは日本人スタッフとともにかなり本格的な和食を提供していると思います。

日本ではお昼にカップ麺を食べることも。この日は焼きそばでした！

Ess-Kulturschock

Marvin Albert (Praktikant der JDG)

Während meiner Studienzeit in Trier arbeite ich auf Teilzeit in einem japanischen Restaurant. Genauer betiteln kann ich das Restaurant leider nicht, denn wir bieten sowohl Ramen, als auch Donburi und japanisches Curry an. Gerichte, die man normalerweise nicht gleichzeitig in einem Restaurant in Japan bestellen könnte.

Die Stadt, in der sich das Restaurant befindet, ist Trier, wo auch meine Universität ist, für welches ich das Praktikum bei der JDG zurzeit mache. Wir haben viele Touristen aus aller Welt und viele verlaufen sich in unseren bescheidenen Laden, aber den Großteil unserer Kunden machen natürlich Deutsche aus, auch Ältere, welche nicht viel Erfahrung mit Asiatischen Kulturen und Essen haben, geschweige denn Japanischen. So kommt es dann nicht selten vor, dass Misosuppe und Gyûdon zu exotischen Delikatessen aus Fernost werden und zum Verzehr beider nach einem Metalllöffel gefragt wird, da die Benutzung von Essstäbchen auch nicht Teil des alltäglichen Lebens ist. Ebenso wird dann bei Ramen eine Gabel benutzt, mit welcher die Nudeln im Ramenlöffel wie Spaghetti aufgerollt werden.

Auch viele Zutaten lösen beim Lesen auf der Karte, bei eben jenen Kunden unterschiedlichste Reaktionen hervor. Oft werden wir dann gefragt, was es denn mit Miso, Anko oder auch Nori auf sich hat, was wir dann auch gerne genau erklären und zu unserer Freude, fast immer als Lecker empfunden wird.

Für diejenigen, die dann doch nicht so viel neues auf einmal wollen, haben wir aber auch ein Gericht, welches zwar nicht unbedingt Japanisch ist, aber für einen Europäer danach aussieht. Wir nennen dieses Gericht Yakisakedon, in Teriyakisoße gebratener Lachs auf Reis mit Frühlingszwiebeln und einer Scheibe Zitrone.

Auch unsere Austauschschüler und Dienstreisende aus Japan haben uns bisher immer gutes Feedback gegeben und sind regelmäßig bei uns zu Gast, also denke ich, dass zusammen mit unseren japanischen Mitarbeitern, wir recht authentisches Essen zubereiten.

特別寄稿 Beitrag

ドイツで日本の食文化を伝える

戸田 英聖（えいせい）
（Eat Happy GmbH ジャパンデスクマネージャー）

著者

私は大学時代から海外が好きでよく海外旅行に行っていました。そのうち海外で生活したいと考えるようになり、どうしたらその夢を実現できるかを模索し始めました。

大学を卒業し、オーストラリアでワーキングホリデーをした後、料理なら海外で生活ができると思い、調理師学校に通いました。その時はまだドイツに住むとは思っていませんでした。卒業が近づき学校の掲示板に貼ってある海外求人を目にしました。そこにはドイツを含むいくつかの求人があり、その時は英語圏に行こうと考えていました。しかし英語圏は他の生徒が先に話を進めていたため、大学時代に第二外国語としてドイツ語を履修していたこともあり、ドイツの求人に応募しました。こうして2006年に私のドイツ（デュッセルドルフ）での生活がスタートしました。ドイツでは寿司屋、創作和食レストラン、アジアレストランなど、5つのレストランで料理人として働きました。

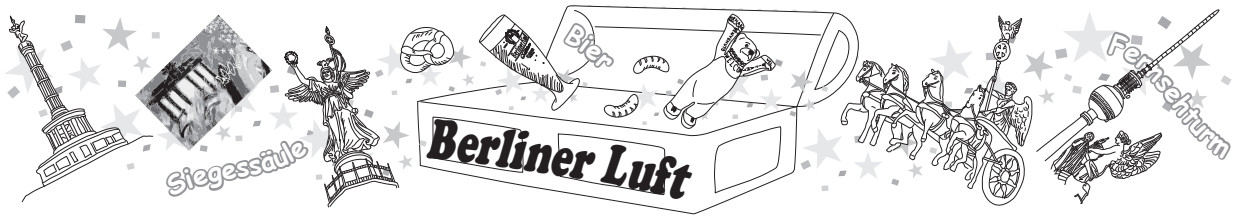
渡独当初は2年で日本に帰国する予定でしたが、2番目に勤めたレストランで更に料理を勉強したいと思い、ドイツに残る決意をしました。そこは、ドイツ食材と日本食材、日本の調理法とヨーロッパの調理法を融合させた創作料理のお店でした。そのうち、ドイツで自分の店を持ち独立したいと思うようになりました。3つ目のレストランでは諸事情により料理長を任されるようになりました。そこで、自分のドイツ語力の低さを思い知らされ、ドイツ語の重要性に気づかされました。そしてこれではいけないと思い、ドイツ語の勉強に集中しようと決めました。そして仕事をやめて約半年間、失業保険を受給しながらドイツ語学校に通いました。

その後、更に2つのレストランで働き、現在の仕事先であるEat Happyにオープニングの社員として就職が決まりました。Eat Happyは今まで働いてきたレストランと違い、お寿司をメインとしたアジア総菜をスーパーマーケット内で販売している会社でした。当時こういった業態はドイツにはなく、創業当初はスーパーマーケットのお寿司といえば工場で作られたものが主流でした。商品は値段も安く品質はいいものではありませんでしたが、違和感なく売れている状況でした。かたやEat Happyの商品はその場で作って販売していますが値段は工場のお寿司よりもはるかに高く成功するとは思えませんでした。しかし、いざ開店してみると私の想像を超えて商品が売れていきました。ドイツ人は食べなれたものを継続して食べる傾向にあると思っていましたが、食に関しても「いいものはいい、こういったものがスーパーで購入できることを待っていたんだ」と思いました。しかし、それでも工場の安価なお寿司もやはり売れ続けていました。そんな中、私が担当するエリアでEat Happyのお寿司と工場のお寿司が並んで売られているスーパーマーケットがありました。ある時、値段が2～3倍高いEat Happyのお寿司の方が売れていることに気づきました。この時、ドイツ人のお寿司の品質に対するニーズの変化を体感しました。今やドイツ人にとってお寿司は特別な食べ物ではなく、日常の食事における選択肢の一つとなっています。このことは、単純にいち日本人として嬉しく思います。このことを背景にEat Happyは現在、ドイツに1,200店舗以上展開しています。私はこの会社でドイツ人のお寿司に対する変化を肌で感じる貴重な経験をしました。

スーパー内に設置されたEat Happyコーナー

私は現在、日本に本帰国していますが、引き続きEat Happyで勤めています。ドイツでは店舗での従業員から始まりRegionalleiter(広域エリアマネージャー)というポジションまでさせていただきました。現在は、16年滞在したドイツを離れ、日本でEat Happyジャパンデスクマネージャーという肩書で活動しています。Eat Happyのお寿司は日本の典型的なお寿司とは異なりますが、せっかくお寿司を提供しているので、私は現在の仕事を通し、日本人がドイツで活躍できる橋渡しをしていきたいと考えています。

Eat Happy GmbH Japan　Desk
住所：兵庫県神戸市中央区御幸通8丁目1番6号
神戸国際会館22階
Tel.: 078-570-5691（固定）090-4505-7202（携帯）
Mail: e.toda@eathappy.com
Website: www.eathappy.de



Das neue japanische Teehaus im Humboldt Forum

Dr. Verena Materna
Vorstandsmitglied der DJG Berlin, Molekularbiologin und wissenschaftliche Koordinatorin

Seit Juli 2021 wurde das Humboldt Forum im Berliner Schloss mit ersten Museumsteilen und Sonderausstellungen schrittweise eröffnet. Höhepunkte mit Bezug auf Japan waren hier die offizielle Einweihung des neuen Teehauses im August 2021 sowie die Eröffnung erster Sammlungsräume des Museums für Asiatische Kunst im Westflügel des Gebäudes. Zahlreiche Besucher nutzten bereits im letzten Jahr die Möglichkeit, die neu kuratierten Museumsexponate in den ersten Ausstellungsräumen des Museums im Westflügel zu besichtigen. Mitte September 2022 war es dann soweit. Mit einem 24-stündigen Programm wurden die verbleibenden Ausstellungsräume im Ostflügel für die Öffentlichkeit freigegeben und die vollständige Eröffnung des Humboldt Forums vermeldet.

Eingang, historische Fassade
入口　歴史あるファサード

Anlässlich dieser Publikumseröffnung wurde auch das Teehaus mit dem Namen „Bōki-an“ nochmals in den Fokus gerückt, das nach einem Zitat des chinesischen Dichters Li Bai eine Klause sein soll, um den Alltag hinter sich zu lassen. Das Teehaus entstand nach Plänen des japanischen Architekten Jun Ura aus Kanazawa, dessen Konzept sich im vorausgegangenen Wettbewerb als Siegerentwurf durchgesetzt hatte. Die Umsetzung erfolgte u. a. mit dem Teemeister Nara Sōkyū, Vertretern des Chadō Urasenke Teeweg-Vereins Berlin und Handwerkern aus Japan. Das Bōki-an wirkt auf den ersten Blick durch seine oktogonale Form und den Einsatz von rotbraunem Cortenstahl sehr modern, vereint jedoch auf den zweiten Blick Modernität und Tradition, sowohl der westlichen als auch der japanischen Kultur mit dem Ziel, einen Ort der interkulturellen Verständigung zu schaffen. Insbesondere die äußere Form des Teehauses nimmt Bezug auf Deutschland und hier im Speziellen auf die Berliner Kaiser-Wilhelm-Gedächtniskirche. Damit erinnert es an die Kriegserfahrungen, die Deutschland und Japan verbinden, und soll gleichzeitig ein Zeichen dafür setzen, dass eine schwierige Vergangenheit überwunden werden kann und ein friedvolles Miteinander möglich ist – eine Botschaft, die zeitlos ist und gerade deshalb heute unsere Herzen besonders stark berührt.

Impressionen des Teehauses im Humboldt Forum:
https://www.humboldtforum.org/de/presse/mitteilungen/neues-teehaus-im-humboldt-forum-eingeweiht/

Informationstafel, Teeraum
茶室のインフォメーションボード

フンボルト・フォーラムの新しい茶室

Dr. ヴェレーナ・マテルナ（ベルリン独日協会理事、分子生物学者、学術コーディネーター）

2021年7月からベルリン宮殿内のフンボルト･フォーラムは博物館の一部と特別展から段階的に公開されています。日本関連のハイライトは2021年8月に行われた、新しい茶室と建物西翼に位置するアジア美術博物館の第一展示室の開幕式でした。大勢の人が昨年すでに、この第一展示室を訪れました。2022年秋の中旬にやっと準備が整い、24時間プログラムとともに東翼にある残りの展示室も公開され、フンボルト・フォーラム全体の開館に至りました。

この一般公開にあわせて、中国の詩人李白によれば「日常を忘れる庵」である『忘機庵』と名付けられた茶室に再び注目が集まりました。この茶室は事前に行われたコンペティションで最も優秀なコンセプトと認められた、金沢出身の日本人建築家、浦淳氏の設計をもとに茶道裏千家淡交会ベルリン協会の代表を務める茶道家の奈良宗久さんや日本の職人たちによって造られました。忘機庵をはじめて見た方は、その八角形のフォルムや使用された赤褐色のコルテン鋼から非常にモダンな印象を持つかもしれませんが、良く見てみれば、西洋文化と和の文化の近代性と伝統が融合し、異文化理解を深める場所を目指していることがわかるでしょう。

Humboldt Forum
フンボルト・フォーラム（シュプレー川側）

特筆すべきは茶室の外形がドイツを、それもベルリンのカイザー・ヴィルヘルム記念教会をイメージしていることです。これは日本とドイツを結ぶ戦争の記憶と同時に、困難な過去を乗り越え平和的共存が可能である、という不朽のメッセージであり、だからこそ今日の私たちの心に強く訴えかけてくるのです。

フンボルト・フォーラムの茶室に関するプレスリリース
https://www.humboldtforum.org/de/presse/mitteilungen/neues-teehaus-im-humboldt-forum-eingeweiht/

新刊書

ドイツの家から地域の魅力が見えてくる『ドイツの家と町並み図鑑』

久保田由希（フリーライター）

木組みの家に、茅葺きの家。レンガの家に、ユネスコ世界遺産に登録されているモダニズム建築の団地。ドイツには幅広い時代の、多彩な家が今も現役で残っています。本書は、個性あふれる家をカラー写真で紹介し、家ができた風土的・歴史的背景も含めてアプローチした1冊です。共著者のチカ・キーツマンさんと私がカメラを手にドイツ各地を飛び回り、取材・撮影を行いました。木組みの家はどう建てられているのか、レンガの家が多い地域とその理由、時代の変化を映し出した集合住宅の設計など、取材をして「なるほど」と目から鱗が落ちた内容を綴っています。建物の背景がわかれば、おなじみの風景もきっとそれまでとは違って見えてくることでしょう。ドイツ各地の風土や文化に触れながら、写真を眺めて旅する気分も味わっていただけると思います。建築の専門知識はいりません。ドイツがお好きな方、旅行に行きたい方、建築好きの方、どなたにも読んでいただける内容です。

『ドイツの家と町並み図鑑』
久保田由希、チカ・キーツマン著
エクスナレッジ
ISBN 9784767830636
1800円＋税　オールカラー

新刊書

『笑え！ドイツ民主共和国（DDR）』

伸井太一（ドイツ製品文化・サブカルライター）

本書は、東ドイツのジョークを丸一冊かけて紹介し、それを通じて東ドイツの歴史と日常生活について理解してしまおうという試みです。本邦初です、たぶん。「ドイツでジョーク？またまたご冗談を」と思われるでしょう。しかし、東独ジョークは、同じく抑圧体制だったナチ・ドイツの政治ジョークと、共産圏のアネクドートとを融合させた稀有な「笑い」なのです。しかも政治ジョークは、場合によっては捕まってしまうことも……。例えば、映画『善き人のためのソナタ』にも出てきた「太陽ジョーク」も収録しています。

本書は、東独ジョークを「日本語訳・ドイツ語・解説」から解剖しています。とくに力を入れたのは解説部分で、ジョークを通じて東ドイツ社会・歴史・生活が見えてくる仕掛けを施しました。なんと図版はおよそ200点！眺めているだけでも愉しいですし、暇つぶしやトイレでの読書本としても、ぜひ。ちなみにトイレ・ジョークもあります（お下品ですけども）。

『笑え！ドイツ民主共和国』
伸井太一、鎌田タベア著
教育評論社
ISBN 9784866240657
1800円＋税　図版資料多数

映画紹介

『ヒトラーのための虐殺会議』2023年1月20日公開

柳原 伸洋
（東京女子大学歴史文化専攻教員・アウクスブルク大学客員研究員）

本作は、1942年1月20日の「ヴァンゼー会議」を扱った作品です。この会議は、ナチ高官たちによって、ベルリン近郊ヴァンゼー近くの邸宅で開催されました。これは、1941年6月の独ソ戦開始後、ナチ・ドイツ勢力圏に現ウクライナ辺りが編入され、同地でユダヤの人びとに対する銃殺から、収容所でのガス殺へと変容する過程に位置づけられます。ウクライナを含む欧州東部地域への暴力が、別の暴力に転嫁されていく、その画期なのです。

会議に集まったのは、ナチ官僚の中堅層で、彼らはインテリ用語で粛々と冷静に「虐殺」の方針を机上で決めていきました。高官たちの決定は「現場」での虐殺に繋がります。しかし彼らは殺害の現場を見ることはありません。

この会議を、最新史料をもとに克明かつ精緻に描き出したのが本作です。ナチ高官同士の競争意識が見え隠れする演技は恐ろしくもすばらしく、観衆も会議に出席しているかのごとき錯覚に陥ります。視聴者は虐殺決定の立会人となることで、現代の私たちも「殺害を現場で見ない者」のひとりかもしれないという可能性に気づかされるのです。

『ヒトラーのための虐殺会議』
2023年1月20日㈮より新宿武蔵野館、ヒューマントラストシネマ有楽町、YEBISU GARDEN CINEMAほか全国公開！
©2021Constantin Television GmbH, ZDF
配給：クロックワークス

ドイツ経済の動き　第78回
活発化する東部ドイツ地域への企業進出

伊﨑 捷治（当協会理事　元ベルリン日独協会副会長　当協会ドイツ時事問題研究会世話人）

➢➢➢ くすぶる不満

ドイツでは電力やガスなどエネルギー価格が高騰し、消費者物価の上昇率は10％を超えるかつてない高さを記録しています。このため、政府に対する批判も強まっていますが、とくに旧東ドイツ地域の主要都市では10月に入って以降毎週月曜日に各地で抗議運動が展開されています。主張の主な点は、大幅な物価上昇の原因はドイツをはじめとする西側諸国がロシア対して強硬な制裁措置を実施しているためにロシアがガスの供給を停止したことなどによるもので、政府はロシア政策を直ちに見直すべきだというものです。

こうした主張は西部ドイツにもないわけではありませんが、東部で際立っているのはやはり東部地域の国民の間に物価に限らず生活の様々な面で不満が多いためだとみられます。これはメルケル政権時代にもそうでしたが、政権が交代した現在も変わっていません。「自分たちは政治によって不利益を被っている。政府はもっと我々の主張に耳を傾けるべきだ」という意識で、今必要な民主主義のための連帯よりもプーチン政権を支持するような傾向にもつながっています。

➢➢➢ 増加する先端産業進出

しかしながら、東部ドイツのインフラや住環境はこの30年余りで目覚ましく改善しており、政府の白書でも生活の質は実際のところ西部ドイツと変わらなくなったとされています。一部の例を除いて立ち遅れていた産業の面でも最近はベルリン近郊で米国テスラ社がギガファクトリーと呼ばれる大工場で電気自動車の生産を開始したほか、インテル社がマクデブルク郊外で170億ユーロを投じて大規模な半導体製造拠点を建設中といった新たな動きがみられます。インテルの例を契機に東部ドイツへの進出を検討する半導体メーカーや関連企業も少なからず出てきていると伝えられます。EUの決定で普及が加速される電気自動車の関連ではダイムラー社が数年前からザクセン州でバッテリーの生産を行っていますが、ほかにも中国CATL社が欧州最大といわれる工場をエアフルト近郊に建設中で、その後もBMW社など数社が製造や開発に名乗りを上げています。

➢➢➢ 期待される好循環

こうした企業が進出を決定するにあたってはインフラや土地のほかに周辺に大学や研究機関があり、優れた人材が確保できることが重要ですが、東部ドイツへの進出の例が増加しているのは大学や研究機関の活動が充実してきていることも大きな理由のようです。産業の進出で研究開発がさらに活発になるという好循環も生まれるとみられます。ドイツ政府が先ごろ東部ドイツの2つの州における先端技術開発センターの設立を22億ユーロで支援していくことを決定したのもその線上にあるといえます。もともとは閉鎖が予定される褐炭産業に代わる新たな産業振興のための事業で、ザクセン州の東部2か所に合わせて1,000人規模の全く新しい「ドイツ宇宙物理学センター（DZA）」が置かれ、ザクセン・アンハルト州ハレの近くには「化学トランスフォーメーション・センター（CTC）」が設置されます。いずれも企画コンペで選定されたもので、それぞれ地域の特性や強みを生かす企画で、両州政府も産業立地としての魅力を増し、「復興の起爆剤になる」として出資を決めており、若い技術者などを中心に設立の準備が急ピッチで進められています。

これまでポーランドとの国境地域では褐炭採掘・発電事業を行ってきたLEAG社が閉鎖後に残される広大な敷地に大規模な太陽光・風力発電パークを建設して、クリーンな電力を供給していくといった産業転換の例もあります。

旧東独地域については国民性がこれほど議論されるところは世界でもほかにないといわれるほどですが、こうしてみると旧東独地域は新たな産業発展の時代を迎えており、それに伴って国民性もまた変わっていくかもしれません。

お知らせ Mitteilungen

新着図書紹介
『反逆のピアニスト杉谷昭子』杉谷昭子・岡田裕著

全国に 2000 人の門下生を育て、最後まで美しい音を求めた国際的なピアニスト、杉谷昭子さんの遺稿エッセイ集です。ご主人、岡田裕さん（日独協会評議員）から見た杉谷さんとの人生と秘話、各界、各世代の知人、門下生による追悼文、さらに愛弟子たちの想い出満載の座談会が収められています。同じ時代をドイツや日本で過ごした日独協会関係者も大勢寄稿しています。

『反逆のピアニスト杉谷昭子』
杉谷昭子・岡田裕著
出版社：ハンナ
ISBN978-4907121334
3,300 円
岡田様からのご寄贈本を協会書庫にてご覧いただけます。

協会としても杉谷さんには大変お世話になり、「クリスマスの集い」では心よくピアノ演奏を引き受けて頂きました。パーティの余興ではありましたが、音楽に一切の妥協を許さず真摯に演奏される姿勢に職員一同感激いたしました。ご主人の岡田さんとは離れての生活が長かったとのことですが、かけがいのないパートナーシップであったことが本書から伝わってまいります。芸術家そして指導者としての情熱にあふれ、関わった人たちに多大な影響を与えた杉谷昭子さんとそれを見守った岡田裕さんの人生が凝縮した著書です。是非お読みください。

柚岡 一明（日独協会 常務理事）

協会事務所の冬休みおよび事務取扱時間

12 月 26 日㈪～ 1 月 4 日㈬まで事務局は冬休みとなり、電話やメールでの対応や事務取扱もこの間はお休みとなります。協会へのお問合せやご連絡には、1 月 5 日以降に順次対応いたします。

上記期間以外のお電話でのお問合せ受付は、引き続き平日午後 2 時から 5 時とさせていただきます。

Die Brücke への寄稿のお願い

日独関連の活動の紹介やエピソード、紹介したいドイツ語圏カルチャー（本、音楽、映画、趣味）、日本の中のドイツ（おすすめのお店、レストラン、場所等）、ドイツ旅行の時の体験談やおすすめスポットなどについて、ご寄稿をお待ちしています。短い記事でもかまいません。（編集方針や誌面の都合で掲載が出来ない場合や全文の掲載ができない場合もあります。）また、シリーズ「私とドイツ」の来年度掲載記事も募集いたします。執筆をご希望の方は、事前に編集部までご連絡ください。

広告掲載のご案内

会報誌 Die Brücke 本誌への広告掲載料は下記のとおりです。

1 ページ　80,000 円 / 1/2 ページ　40,000 円 / 1/4 ページ　20,000 円
チラシ封入料：法人会員 20,000 円
個人会員 25,000 円 / 一般 30,000 円

広告掲載をご希望の場合は、発行日の 3 か月前（4 月号への掲載の場合は 1 月末まで）、チラシ封入をご希望の場合は、発行日の半月前までに編集部にご連絡ください。

編集後記

■本誌で「食」の話題がかくも満載の号は初めてでは？藤本さんの記事を読んで、以前協会職員でいらっしゃった鎌田タベアさんの著書「日本人が知りたいドイツ人の当たり前」に「夜は冷たい食事しか食べないって本当？」というコーナーがあったことを思い出しました。因みに、今も 2/3 の家庭ではイエスだそうです。戸田さんの記事では、十年前にドイツの一流ホテルの朝食ビュッフェで Sushi と表記された曰く言い難い食べ物が並んでいたことを思い出し、「ひょっとして時代は変わったかも」との期待が芽生えました。最後に「さあ、今年もシュトレンを買いに行かなくっちゃ」。（松）

■会員の藤本氏の記事を読んで：今から遡ること 30 年ほど前、家族でドイツで暮らしていたのですが、私の両親も週に数回 Volkshochschule のドイツ語講座に通っていました。そのドイツ語講座のメンバーでは家族やパートナーも一緒になってよくパーティーをやっていて、年上のお兄さんお姉さんたちに随分遊んでもらった思い出があります。メンバーの出身も様々で、紛争地域から来て、アルバイトとドイツ語の勉強を頑張っていた、とても優しくしてくれた方が強く印象に残っています。随分大人に見えたものでしたが、当時 20 代半ばだったとか。もうお会いすることもないのですが、心穏やかに過ごされていることを願うばかりです。会員の皆様も、どうか良いお年をお迎えください。（田）

Fröhliche Weihnachten und einen guten Rutsch ins neue Jahr!
今年も大変お世話になりました。良いお年をお迎えください！来年もどうぞよろしくお願いいたします。
2022 年 12 月 26 日㈪から 2023 年 1 月 4 日㈬まで事務局はお休みとなります。
1 月の会報誌は休刊です。次は、Die Brücke 2 月号（ 2 月 1 日発行予定）のお届けとなります。

Die Brücke 架け橋
日独協会機関紙「Die Brücke 架け橋」第 727 号　2022 年 12 月 1 日発行／隔月刊
編集責任：柚岡一明（編集長）公益財団法人日独協会
jdg@jdg.or.jp ／電話：03-5368-2326 ／ FAX：03-5368-2065 ／ http://www.jdg.or.jp
住　所：〒160-0016 東京都新宿区信濃町 18-39（マヤ信濃町 2 番館）／印刷・製本：三和印刷株式会社
禁 無断転載

HITACHI
Inspire the Next

Hitachi Social Innovation is
POWERING GOOD

地球規模の社会課題。一人ひとりの豊かな暮らし。
日立は、サステナブルな社会と日々の幸せのために、
デジタル・グリーンテクノロジーを駆使して
社会イノベーションをさらに加速させていきます。

「Die Brücke 架け橋」第七二七号令和4年12月1日発行（隔月刊）公益財団法人 日独協会 定価一部三百円